

第19回 GMO フリーゾーン運動全国交流集会inえひめ・大会宣言

私たちの遺伝子操作食品への取り組みは、とても重要な局面になっています。遺伝子組み換え食品は、世界中の市民が反対したことで、行き詰まりました。それに代わって登場したゲノム編集食品も、世界的にはまだほとんど流通していません。しかし、日本では流通しています。作物では、高 GABA トマトのミニとピューレがスーパーなどの店頭に並ぶようになりました。魚では、肉厚マダイと成長を早めたトラフグの販売・流通が始まり、さらに成長を早めたヒラメの届け出まで行われました。開発も活発で、愛媛県ではゲノム編集柑橘類の開発を進めています。

これまでの遺伝子組み換え作物は、海外産でした。しかし、ゲノム編集食品は日本で栽培・養殖されたものです。それを後押ししてきたのが、政府の規制なしの方針です。環境影響評価もなく、食の安全性評価もなく、食品表示までさせないように動きました。その結果、日本がゲノム編集食品の最先進国になってしまいました。この動きに加えて日本政府はさらに、遺伝子組み換え食品表示制度を改定して、「遺伝子組み換え不使用」表示をさせず、消費者に選択させないように変更しました。

これらの動きに対して私たちは、地元から、地域から、取り組みを強めてきました。ゲノム編集トマトに対しては自治体に働き掛け、小学校や福祉施設への苗の無償配布の阻止に取り組んできました。ゲノム編集魚に対してはふるさと納税の返礼品から取り下げる地元の運動を応援してきました。この運動をさらに広げるため、地元の議会に働きかけ「ゲノム編集食品表示を求める意見書」を決議させる動きを作り、同時に GMO フリーゾーンを拡大させ、遺伝子操作食品を各地で作らせない取り組みを行ってきました。

遺伝子組み換え作物、ゲノム編集作物・魚、そこから作られる食品を拒否し、栽培・養殖させない、流通させない、食べないという取り組みを日本中に広げていくことで、日本の農林水産業と私たちの食卓を守っていくことが極めて大事な状況になっています。

本日、私たちは、豊かな自然と農と食文化を持ち、海の資源に恵まれた地である愛媛から、強い思いを込めて発信します。国内はもとより世界の人々とともに、遺伝子組み換え作物、ゲノム編集作物・魚を拒否し、GMO フリーゾーンを拡大していきます。GMO フリーゾーンの輪を広げることで、地域の農と食文化を守り、食の安全と環境を守ります。

2025年3月1日

大会参加者一同